名古屋女子大学　紀要　40（人・社）　201～212　1994

カースン・マッカラーズの『悲しき酒場の唄』について

石川和代

On Carson McCullers' *The Ballad of the Sad Café*

Kazuyo ISHIKAWA

I

The Ballad of The Sad Café(1951)は、Carson McCullersの4つ目の作品で、他のいくつかの短編小説と合わせて刊行された中編小説である。McCullersは、*The Heart is a Lonely Hunter* (1940)、*Reflections in a Golden Eye* (1941)、*The Member of the Wedding*(1946)において人間の愛と孤独の主題を描いているが、この作品もまた愛と孤独を巧みに描いたものであり、Ihab Hassanは、"It is in *The Ballad of the Sad Café* that the doctorine of love, implicit in all her fiction, is most clearly enunciated"[1] と述べている。Hassanがこのように言うのは、物語のなかばで、語り手によって導入される愛の理論が、批評家の関心を引きつけてきたからであると思われるが、この愛の理論に関しては、疑問を示している批評家もある。例えば、Albert J. Griffithは、"The famous disquisition on love.... is no psychological explanation at all; at best it is a philosophic hypothesis which only begs the question."[2] と、愛の理論が登場人物の心理を説明していないことを指摘している。また、Joseph R. Millichapは、"The use of the bizarre theory of love offered by the narrator of *Ballad* as a formula for interpreting all of McCullers' fiction has hampered analysis not only of the *novella* itself but of her other works as well."[3] と述べている。

この物語の主な登場人物は、女主人公で、男のような骨組みと筋肉を持ったMiss Amelia Evans、彼女の前の夫で、孤児のやくざ者Marvin Macy、彼女のいとこと名乗るせむしのLymon Willisの三人であり、MarvinとAmelia、AmeliaとLymon、LymonとMarvinというそれぞれの関係を通して、愛と孤独が描かれている。この小論においては、この作品における愛と孤独の主題を考察すると共に、愛の理論が作品の分析に役立つのかどうかを考えてみたい。

II

物語は、舞台となる南部のわびしい田舎町の巧みな描写から始まり、過去にさかのぼって、Ameliaを中心とした愛と孤独が描かれた後、再び、冒頭と同様なわびしい田舎町の描写にもどる形式をとっているが、冒頭の町の描写は次のようなものである：

> The town itself is dreary; not much is there except the cotton-mill, the two-room houses where the workers live, a few peach trees, a church with two coloured windows, and a miserable main street only a hundred yards long. On Saturdays the tenants from the near-by farms come in for a day of talk and trade. Otherwise the town is lonesome, sad, and like a place that is far off and estranged from all other places in the world.[4]

南部の田舎町のわびしい様子を最初に描くことで、そこに住む人物たちもまた孤独な人々であ

ることを、予測させようとしているような描写である。「まるで世界のどの場所からも遠く離れた、孤立した場所のようだ」との表現は、町そのもののわびしさを表わすのに効果的であり、この冒頭の描写があるが故に、Lawrence Graver は、"The boldness and precision with which she creates the sense of a town estranged from the rest of the world is the first of Mrs. McCullers' successes in 'The Ballad of the Sad Café.'"[5] と述べているのであろうと思われる。

続いて、この町の本通りについて、"If you walk along the main street on an August afternoon there is nothing whatsoever to do."(p. 7)と、8月の午後には何もすることのない退屈な通りであることを述べた後、Amelia の住んでいる家が町の中心にある一番大きな建物であり、"boarded up completely and leans so far to the right that it seems bound to collapse at any minute."(p. 7)であることを説明する。このように、完全に板囲いをした、全く人けのないように思われる家の2階にある、板囲いのないたった一つの窓から、ひどく暑い午後に、時々 Amelia が顔を出して1時間かそこらぼんやりと外をながめているのだが、その顔は、"a face like the terrible dim faces known in dreams—sexless and white, with two grey crossed eyes which are turned inward so sharply that they seem to be exchanging with each other one long and secret gaze of grief."(pp. 7 - 8)であり、言い様のない孤独に苦悩する Amelia の内面を反映していると思われる。Amelia が窓を閉めた後の、ひっそりとして通る人もなく、退屈な通りの状況は次のように描写されている："These August afternoons—when your shift is finished there is absolutely nothing to do; you might as well walk down to the Forks Falls Road and listen to the chain gang."(p. 8)この描写とほぼ同様の描写が物語の結末部分でも繰り返されるが、"chain gang" とは、一本の鎖につながれたまま屋外労働をする囚人たちのことであり、この "chain gang" に耳を傾けるくらいしかすることがないというのもわびしい限りである。こんな町にもかっては一軒の酒場があり、それは Amelia と Lymon がやっていた酒場であること、つまり、今では人けのないように見える板囲いをした家が、かっては人々が集まり楽しい時を過ごした酒場であったことが語り手によって紹介され、この物語に関連したもう一人の人物として、Amelia の前の夫 Marvin Macy の名があげられ、物語は過去へとさかのぼる。

確かに、Amelia の家はかって酒場であったが、酒場になったのは Lymon がやってきてからのことで、以前は、飼料、肥料、小麦、かぎたばこなどの日用品を扱う店であり、Amelia が亡くなった父親から引き継いだものであった。彼女はこの店の他に、3マイルほど沼地の奥へ行ったところに蒸留酒製造所を持っていて、とても質の良いウイスキーを作り、それを売って得る収入もあり、一人暮らしであったが、経済的には豊かであった。Amelia が男のような体つきであったことは最初にふれたが、彼女の容姿は次のように描かれている：

> She was a dark, tall woman with bones and muscles like a man. Her hair was cut short and brushed back from the forhead, and there was about her sunburned face a tense, haggard quality. She might have been a handsome woman if, even then, she was not slightly cross-eyed. There were those who would have courted her, but Miss Amelia cared nothing for the love of men and was a solitary person.(pp. 8 - 9)

Amelia は、男のような体つきであっても、わずかに斜視でさえなければ、結構きれいであったかもしれないが、男性の愛など少しも気にかけない孤独な人物であったというのである。こんな Amelia も一度だけは結婚したことがあり、それはたった10日間の結婚だったと語り手は言う。だが、この結婚についての詳細にはふれず、それはもっと後で説明されることになる。

Amelia は、体つきが男性的であっただけでなく、男のするような仕事も含めて何でもこな

す女であったらしい。彼女は、"chitterlings and sausage"(p. 9)を近くの町で売り、秋にはもろこしから "dark golden and delicately flavoured"(p. 9)なシロップを作るが、2週間で煉瓦の屋外便所を建てるほど、大工仕事も得意であった。しかし、人間だけは思う通りにできなかったと語り手は言っている：

> It was only with people that Miss Amelia was not at ease. People, unless they were willy-nilly or very sick, cannot be taken into the hands and changed overnight to something more worth while and profitable. So that the only use that Miss Amelia had for other people was to make money out of them.(p. 9)

Amelia が、人間を金儲けの材料としてしか見られないのは、哀れであるとしか言い様がないが、父親の手一つで育てられ、その大事な父親が亡くなって、女一人で生きていかねばならなくなった彼女にとって、すべては金という姿勢をとることは、自分を守るためには仕方のないことであったと考えられる。いずれにせよ、彼女は金儲けに力を入れ、その地方一帯で一番の金持ちであった。また、彼女は訴訟が好きで、どんな小さなことでも、訴訟の材料にして、告訴するという一面も持っていたということである。

さて、Amelia と Marvin Macy の結婚のことは、作品の中では後のほうで述べられるのだが、彼女と Lymon の出会いよりも先に起こった出来事なので、まずこのことについて先に考えてみたいと思う。Amelia に結婚を申し込んだ Mavin は、"the handsomest man in this region—being six feet one inch tall, hard-muscled, and with slow grey eyes and curly hair."(p. 34)であり、いい給料をとっていて金まわりもよく、後ろ蓋を開けると滝の絵が出てくる金時計をもっているような男であったが、性格は良くなくて、彼の評判の悪さは、この地方ではどの若者にもまさるとも劣らないくらいであった。少年の頃の Marvin は、"the dried and salted ear of a man he had killed in a razor fight."(p. 35)を何年も持ち歩いていたり、ただ面白いからというだけで、"the tails of squirrels in the pinewoods"(p. 35)を切り落としたり、"those who were discouraged and drawn towards death."(p. 35)を誘惑するために、禁制品の "marijuana weed"(p. 35)を腰のポケットに入れて持ち歩いたりしていたという。彼がこのような醜悪な性格になったのは、彼が幼い頃につらい目にあったからだと語り手は言う：

> He was one of seven unwanted children whose parents could hardly be called parents at all; these parents were wild younguns who liked to fish and roam around the swamp. Their own children, and there was a new one almost every year, were only a nuisance to them. At night when they came home from the mill they would look at the children as though they did not know wherever they had come from. If the children cried they were beaten, and the first thing they learned in this world was to seek the darkest corner of the room and try to hide themselves as best they could.(p. 35)

このように幼い時に、全く親から愛情を持って扱われなかった経験が、Marvin の幼い心を深く傷つけ、Marvin をゆがんだ性格の人間にしてしまったのである。語り手の言葉で言うならば、"The heart of a hurt child can shrink so that for ever afterward it is hard and pitted as the seed of a peach."(p. 36)であり、また、"... the heart of a such a child may fester and swell until it is a misery to carry within the body, easily chafed and hurt by the most ordinary things."(p. 36)であるが故に、Marvin の心は傷つき、醜悪な性格の人間になったと言える。また、このように親の愛情を知ることもなく、孤児として、この後、他人の家で育てられた Marvin は、非常に孤独な人間であり、孤独という点において、Amelia と共通するものがあると考えられる。

こんな Marvin が24才の時、"solitary, gangling, queer-eyed girl" (p. 35) の Amelia に憧れるようになり、それも Amelia の財産が目当てではなく、ただひとすじに愛情から彼女を好きになる。その Amelia への愛情は、Marvin の醜悪な性格を一変させてしまう。彼がいかに変わったかは、次の箇所にはっきりと描かれている：

> He reformed himself completely, He was good to his brother and foster mother, and he saved his wages and learned thrift. Moreover, he reached out towards God. No longer did he lie around on the floor of the front porch all day Sunday, singing and playing his guitar; he attended church services and was present at all religious meetings. He learned good manners: he trained himself to rise and give his chair to a lady, and he quit swearing and fighting and using holy names in vain. So for two years he passed through this transformation and improved his character in every way. (p. 37)

あの性格の悪い Marvin がこのように変わるとは、本当に愛の力は大きいと言わざるを得ない。愛が人を変えるのは Amelia の場合にも同じであるが、それは Amelia が Lymon を愛するようになった時のことなので、後でまたふれることにしたい。

Marvin は、Amelia を愛し始めて２年後にやっと彼女に愛を告白し、二人は結婚するが、前にも述べたように、この結婚はたった10日間しか続かなかった。結婚式が終わって店に帰る途中、Amelia は百姓と決めた薪の商談の話を始め、彼女が花婿を扱う態度は、酒を買いにやって来る客を扱うのと同じ態度であったという。結婚の初夜はどうかといえば、豪勢な夕食の後、夜11時に二人は２階の寝室へ上がったのだが、30分もたたないうちに、Amelia は半ズボンにカーキ色の上着という服装でどんどんと階段を踏みながら降りてきて、その時の彼女は真黒に見えるくらい顔色がくもっていた。彼女は台所のドアをバタンと閉めてから、それを憎々しげにけとばし、やっと心を落ち着けると、料理用のストーブの上に両足をのせ、*The Farmer's Almanac* を読みながら、コーヒーを飲み、亡くなった父親のパイプでたばこを一服吸い、台所で過ごし、夜明け近くになると、事務室で新しく買ったタイプライターを使う練習を朝までやったというのである。結婚初夜にこのような過ごし方をしたということは、Amelia がこの晩に、Marvin との夫婦の交わりを拒否したことを暗示していると考えられる。何とか Amelia の気持を引きつけようと思った Marvin は出かけて行き、オパールの指輪、当時流行のピンク色のエナメルのアクセサリー、ハート型の飾りがついた銀の腕輪、２ドル半のキャンディーの箱といったプレゼントを買って来るのだが、それに対する Amelia の反応は次のようである："Miss Amelia looked over these fine gifts and opened the box of candy, for she was hungry. The rest of the presents she judged shrewdly for a moment to sum up their value—then she put them in the counter out for sale." (p. 39) Marvin にしてみれば、せっかく買って来たプレゼントを売り物用のカウンターにのせられたショックは大きかったであろうと思われる。その晩も Marvin の努力はむだに終わり、Amelia は台所のストーブのそばに羽根布団を持ち出して、一人でぐっすり眠る。

このようにして３日間が過ぎ、４日目に Marvin は弁護士を連れてきて、彼の全財産を Amelia に譲る書類に署名をして、Amelia に10エーカーの森林を与えるが、これは Amelia の気持を自分の方へ向けようとする Marvin の涙ぐましい努力と言わざるを得ない。ところが、沼地へウイスキーを持って行って飲み、酔っ払って戻って来た Marvin が、潤んだ目を見開いて Amelia に近づき、肩に手をかけて、彼女に何か言おうとすると、彼がまだ口も開かないうちに、Amelia はこぶしで Marvin をなぐりつけ、彼は投げとばされて壁にぶつかり、前歯を一本折る

といった始末である。その後も同じようなことが何度もあり、しまいには Marvin は Amelia の家から完全に追い出されてしまう。そんなことがあってから、Marvin は、やつれた、狂人のような顔つきで、ライフル銃を持ち出して、Amelia をじっと見つめていたり、ある晩彼女の店の窓から忍び込み、ただ暗闇の中ですわっていたりすることがあり、Amelia が、家宅侵入罪で彼を刑務所に閉じ込めることができるように話をしようと、役所へ出かけて行った日に、Marvin は、死ぬまでには必ず仕返しをするという脅迫も含まれている、激しい口調のラブレターを残して町から出て行くのである。Amelia が、結婚式をあげておきながら、なぜ Marvin を受け入れなかったかという点について、John B. Vickery は、"By refusing to accept him into her home and life, ...Amelia preserves her physical and emotional inviolateness. Thus Marvin's love simply reinforces her in her chosen isolation and complete self-sufficiency."[6] と述べ、Louise Westlingは、"...by accepting her in the marriage, Amelia would have had to renounce the masculine sources of her strength. Such a capitulation to the female mysteries that she has avoided all her life would be unthinkable."[7] とフェミニズムの立場から述べているが、一体本当はどうなのであろうか。

Amelia が Marvin と結婚式をあげたのは、父親が亡くなってからのことである。Amelia は父親の手一つで大事に育てられたので、父親を亡くした時の彼女の悲しみは大きく、男のように強く見える Amelia も、心の底では、父親のかわりに頼れる相手を求めたと考えることができる。Marvin はかなりの美男子で、筋骨たくましい男であったので、大女で男みたいで斜視の Amelia にはもったいない相手であり、その意味では、Amelia が Marvin の求婚を断わる理由はなかったのであろう。では、なぜ彼女は結婚式をあげておきながら、Marvin との夫婦の交わりを拒否したのであろうか。その理由は、次の箇所に表われていると思われる：

> In the face of the most dangerous and extraordinary treatment she did not hesitate, and no disease was so terrible but what she would undertake to cure it. In this there was one exception. If a patient came with a female complaint she could do nothing. Indeed at the mere mention of the words her face would slowly darken with shame, and she would stand there craning her neck against the collar of her shirt, or rubbing her swamp boots together, for all the world like a great, shamed, dumb-tongued child. (pp. 22-23)

医者としての腕もあり、かなりいろいろな病気を治していたAmeliaも、婦人病だけはお手上げで、言葉を聞いただけで、恥をかいて口がきけなくなった大きくなった子供みたいになってしまうというのである。そんな彼女の反応から考えると、父親の手一つで大事に育てられた彼女は、女性として未成熟であり、結婚というものが何であるか知らないままに結婚式をあげたため、Marvin が初夜に彼女をものにしようとした時、あのように Marvin を受け入れることを拒否し、以後も彼を拒み続けることになったのではないかと思われるのである。それにしても、かなりの美男子である Marvin が、なぜ、大女で男みたいで斜視の Amelia のような女を愛してしまったのかは疑問である。

ここで、語り手によって導入される愛の理論がどんなものか見てみたいと思う。語り手は、"First of all, love is a joint experience between two persons—but the fact that it is a joint experience does not mean that it is a similar experience to the two people involved." (p. 33) と語り始め、愛する者と愛される者は別々の世界の人間であり、愛される者は、"a stimulus for all the stored up love which has lain quiet within the lover for a long time hitherto." (p. 33) にすぎないと言う。また、愛する者は自分の愛が孤独なものであることを知っており、そのために悩

むのであり、愛する者のすべきことは、自分の愛をできる限り自分の心の中にしまっておくことであるとも言う。そして誰でも愛する者になり得るのであり、男でも女でも子供でも、この地上に住む人間なら誰でもかまわないと述べている。次に、語り手は愛される者についての説明に入り、"Now, the beloved can also be of any description. The most outlandish people can be the stimulus for love."(p. 33)と語り、例をあげて、どんな人でも愛される者になり得ること、愛の価値や品質は、ただ、愛するもの自身によって決まることを説明する。そしてこの愛の理論の最後は、我々のほとんどすべてが、愛されるよりは愛することを望むものだという説明になっている：

> Almost everyone wants to be the lover. And the curt truth is that, in a deep secret way, the state of being beloved is intolerable to many. The beloved fears and hates the lover, and with the best of reasons. For the lover is for ever trying to strip bare his beloved. The lover craves any possible relation with the beloved, even if this experience can cause him only pain.(p. 34)

この愛の理論をMarvinとAmeliaに当てはめて考えてみると、Marvinが、大女で男みたいで斜視のAmeliaを愛したことも、あり得ないことではないことがわかる。また、愛する者はたえず愛される者の衣をはいで裸にしようとし、たとえ愛される者に苦痛しかもたらさないとしても、愛する者は愛される者とありとあらゆる関係を持とうと熱望するので、愛されているという状態は多くの人にとって耐えがたいものであり、愛される者は愛する者を恐れ憎むという説明は、MarvinとAmeliaの状況を一応は説明していると言うことができる。しかし、それは表面的な説明にすぎず、Marvinの愛を受け入れなかったAmeliaの内面をすべて説明しているとは思われないので、冒頭で引用した、Griffithや、Millichapのような考えもあって当然であると言わざるを得ないのである。

ところで、AmeliaとLymonの愛はどんなものであろうか。こちらの方は、AmeliaがLymonを愛すようになり、愛によってAmeliaが変わる様子が描かれていく。Ameliaが30才の春、つまり、Ameliaがたった10日間の結婚でMarvinと別れて以後、随分長く一人暮らしをした後に、Lymonが登場する。Lymonはせむしで、背は4フィートそこそこしかなく、ゆがんだ足は細すぎて、ねじれた大きな胸と肩にのったこぶの重みを支えきれないように見える。ひどく大きな頭で、深くくぼんだ青い目ととがった小さな口をして、顔つきは穏やかそうでいながら、人を食ったところがあり、目の下には薄紫色の隈があるといった具合である。Lymonがぼろぼろでほこりだらけのコートを着て、縄でしばったおんぼろのスーツケースを持って、Ameliaの家へやって来る時、遠くから見るとまるで子供のように見えたのも無理はない。彼は、古くさい写真を見せて、自分の母親とAmeliaの母親が腹ちがいの姉妹なので、Ameliaと自分はいとこであると言って、Ameliaをたずねて来る。LymonがAmeliaの店の入口でわっと泣き出すと、彼女は、この本当に親類かどうかもわからないせむしの男をしばらくながめた後、用心深く、指でそっと背中のこぶをおさえてみてから、"Drink....It will liven your gizzard."(p. 14)と言って、ポケットからウイスキーのびんを取り出し、手のひらで飲み口をぬぐってから、Lymonに渡す。つけで酒を売ったこともないAmeliaが、ただで人に酒を与えることはいまだかってないことである。父親が亡くなり、Marvinとの結婚もうまくいかなかったAmeliaは、外見は男まさりで強そうでも、心の中は孤独であったはずである。彼女は、自分をたずねて来て店の入口で泣き出したLymonもやはり孤独な人間であろうと同情し、元気づけようとしたのであろう。

Amelia は Lymon を店の中に入れてやり、夕食には二人でなかなかの御馳走を食べ、Lymon の寝室として、2階の、かって Marvin も使ったことのある、昔は父親の部屋であった、立派な家具のある部屋を使わせてやることになる。Amelia の店に出入りする者たちは、Amrlia がじきに Lymon を追い出すものと思うのだが、2日目の晩に Lymon が姿を現した時は、まるでその店の主人のような尊大な態度になっている："The hunchback came down slowly with the proudness of one who owns every plank of the floor beneath his feet."(p. 24) Amelia の店の入口で泣いていた Lymon とは大ちがいである。服装もすっかり清潔になっていて、コートはブラシをかけて小ぎれいに繕ってあり、その下には Amelia の真新しい赤と黒のワイシャツを着て、膝までの細い半ズボンと黒い長靴下をはき、ピカピカに磨いたばかりの靴をはいている。更に、大きな青白い耳がほとんど全部隠れるくらいに、黄緑色のウールのショールを首に巻いているのだが、その端がもう少しで床につきそうに垂れている。この変わりようは、すべて Amelia が彼のために整えてくれたからであることがよくわかる。また、Lymon は、いつも口の中が酸っぱいからと、砂糖とココアを混ぜたものを食べるのであるが、それを入れるために、Amelia は、父親がかって使っていた立派なかぎたばこ入れを、Lymon に使わせてやっている："Each man knew well what it was the hunchback was handling. For it was the snuffbox which had belonged to Miss Amelia's father. The snuffbox was of blue enamel with a dainty embellishment of wrought gold on the lid."(p. 25) Amelia が Lymon の服装を整えてやったこと、父親がかって使っていた立派な部屋とかぎたばこ入れを彼に使わせてやっていることから、Amelia にとって Lymon は大事な存在になったと考えられる。

Amelia の店が酒場になるのは、すっかり変わった Lymon が2階から降りてきた、この晩のことである。Amelia は夜11時頃に店に出てきて、Lymon のすわっているほうを見て、ちょっと視線をとめてから、店内のほかの連中の方を見て、"Does anyone want waiting on ?"(p. 27) と静かに言い、何人かがこれに応じた。それまで Amelia は客に酒を売ることはしても、客が店の中で酒を飲むことは許さなかったのだが、この日は、Lymon と一緒に台所へ行き、酒のびんを何本か店内へ運んできて、グラスを用意し、ビスケットを2箱あけて大皿に盛り、カウンターの上に出して、誰でも自由に食べられるようにするといった具合に、全く簡単に酒場は始まったのである。Lymon は、"an instinct which is usually found only in small children, an instinct to establish immediate and vital contact between himself and all things in the world."(p. 26) を持っていて、店へ降りてきて30分もしないうちに、そこにいる一人一人の心を直接自分に結びつけてしまう。こう言った Lymon の性格が、酒場の繁盛につながっていくのだが、語り手もまた、"...it was hunchback who was most responsible for the great popularity of the sad café. Things were never so gay as when he was around."(p. 49) と述べている。

酒場が始まった夜の Amelia の様子の描写は、彼女が完全に Lymon を愛すようになったことを巧みに表わしている：

> Outwardly she did not seem changed at all. But there were many who noticed her face. She watched all that went on, but most of the time her eyes were fastened lonesomely on the hunchback. He strutted about the store,....Where Miss Amelia stood, the light from the chinks of the stove cast a glow, so that her brown, long face was somewhat brightened. She seemed to be looking inward. There was in her expression pain, perplexity, and uncertain joy. Her lips were not so firmly set as usual, and she swallowed often. Her skin had paled and her large empty hands were sweating. Her look that night, then, was the lonesome look

of the lover.(pp. 29-30)

こんな風に、Lymonを愛し始めたAmeliaは、彼と共に酒場の経営に力を注ぎ、立派な自動ピアノも店に入れ、本式の酒場として、毎晩6時から12時まで店を開くようになる。また、愛するLymonの体を丈夫にするために、Ameliaは、毎日朝晩の2回、彼の体を酒で摩擦してやったり、自分のフォードを運転して、Lymonを映画や遠方の品評会や闘鶏を見に連れて行ったりする。また、Lymonは夜になると病人のようになり、ベッドの中で暗闇を見ているのがこわく、非常に死を恐れていたので、Ameliaは、Lymonがただ一人になって恐怖におののかないように、気を配っていたということであるし、酒場によってLymonは仲間と楽しみを得て、夜を生き抜くことができたということなので、Richard M. Cookの、"It is for him alone that she hasturned her feed store into a café. The café is her most elaborate gesture of affection."[8]という意見のように、酒場は、AmeliaのLymonに対する愛情を表わす振る舞いであると言えるであろう。

AmeliaのLymonに対する愛情を表わす事柄は、物語のあちこちに散りばめられている。彼女は手術して医者に取ってもらった自分の腎臓の石をビロードの小箱に入れて大切にしていたが、Lymonがやって来て2年目に、時計の鎖にはめさせて彼に与える。自分が大変な苦しみを経験して得たものをLymonに与えるのであるから、これはAmeliaのLymonに対する愛情の表われと言ってよいであろう。また、Ameliaが亡くなった父親の話を懐かしそうにLymonに話す場面の最後では、Ameliaが父親の話をするのはLymonだけであることが述べられ、その後に、"That was one of the ways in which she showed her love for him. He had her confidence in the most delicate and vital matters."(p. 46)とあるように、AmeliaはLymonにだけは、どんなことでも話していたわけで、それも彼女のLymonに対する愛情の表われなのである。愛するLymonをながめる時のAmeliaの様子の描写には、"Miss Amelia watched him with her hands in her pockets and her head turned to one side. There was a softness about her grey, queer eyes and she was smilimg gently to herself."(pp. 49-50)といったAmeliaの優しい表情を表わすものがある。また、彼女に関する次のような描写もある：

> During these weeks there was a quality about Miss Amelia that many people noticed. She laughed often, with a deep ringing laugh, and her whistling had a sassy, tuneful trickery. She was for ever trying out her strength, lifting up heavy objects,....Cousin Lymon was with her always, traipsing along behind her coat-tails, and when she watched him her face had a bright, soft look, and when she spoke his name there lingered in her voice the undertone of love.(p. 55)

これも、AmeliaがLymonを愛していることが巧みに描かれている所と言えるであろう。また、Lymonを愛するAmeliaは、どこかよその町へ出かける時は、Lymonに一緒に行ってほしいと言う。彼女はいつもLymonをそばに置いておきたくて、よそへ行くとなると淋しくてたまらないといった具合である。これらのいくつかの描写から、AmeliaがLymonを愛していることは明白であるが、美男子のMarvin Macyの愛を受け入れるのを拒んだAmeliaが、なぜせむしのLymonを愛すようになったのであろうか。

この二人の愛の場合も、一応は、例の愛の理論が当てはまり、Ameliaがせむしの Lymonを愛してしまう可能性があることは理解できなくもない。しかし、Marvinと結婚式をあげておきながら、夫婦の交わりを拒否したAmeliaであるから、そのAmeliaが、本当のいとこかどうかもわからない男性と一緒に暮らし始めたからといって、彼女がその男性と夫婦のような生活

をし始めたとは考え難いが、実際はどうなのであろうか。Lymon はせむしであるので、背も低く、遠くから見ると子供と見間違えられるほどであるが、彼はまた、前にも述べたように、小さな子供にしか見られないような本能を持っている。また、Lymon が子供みたいで年令がわからないことを示す、次のような描写箇所がある：

> There was something childish about his satisfaction with his painting. And in this respect a curious fact should be mentioned. No one in the town, not even Miss Amelia, had any idea how old the hunchback was. Some maintained that when he came to town he was about twelve years old, still a child—others were certain that he was well past forty. His eyes were blue and steady as a child's, but there were lavendar crêpy shadows beneath these blue eyes that hinted of age. It was impossible to guess his age by his hunched queer body. (p. 76)

Lymon が何才なのか誰にもわからないが、彼には何か子供じみたところがあり、本人にたずねても全くわからないと答えるのみで、彼の年令は最後までなぞのままである。Amelia と Lymon が一緒に沼を渡る時に、Amelia がかがんで Lymon を背中に乗せ、彼女が "wading forward with the hunchback settled on her shoulders, clinging to her ears or to her broad forehead." (p. 31) している情景を思い浮かべると、ますます Lymon は子供みたいに思えてくる。Lymon はせむしであり、体も丈夫ではなさそうなので、彼が男性として未成熟である可能性がある。もしそうならば、Amelia が Lymon に対して抱いた愛情は、女性が男性を夫として愛するようなものではなく、Millichap が、"He is a man loved without sex, a child acquired without pain, and a companion which her limited personality finds more acceptable than a husband or a child." [9] と述べ、Louise Westling が、"With Lymon she feels safe in revealing affection, for she can baby and pet him without any threat of sexuality." [10] と述べているように、親が小さな子供を可愛がるような、性的関係を伴わない愛情であると思えば、納得がいくような気がするのである。

いずれにしても、Amelia と Lymon は二人で仲良く酒場を経営し、楽しく暮らすのであるが、Amelia に追い出されてから数々の犯罪を犯して刑務所に入っていた Marvin が，戻って来ることになり、それが Amelia と Lymon の関係を崩し、更には酒場の破壊へとつながっていく。Marvin が刑務所から出てはじめて Amelia の酒場へやって来た時に、Lymon はなぜかやっきになって、Marvin の気を引こうとするが、そのやり方は滑稽である：

> Cousin Lymon had a very peculiar accomplishment, which he used whenever he wished to ingratiate himself with someone. He would stand very still, and, with just a little concentration, he could wiggle his large pale ears with marvellous quickness and ease. This trick he always used when he wanted to get something special out of Miss Amelia, and to her it was irresistible. Now as he stood there the hunchback's ears were wiggling furiously on his head, but it was not Miss Amelia at whom he was looking this time. The hunchback was smiling at Marvin Macy with an entreaty that was near to desperation. (p. 59)

Lymon は、こんな風に耳を動かして、Marvin の気を引こうとしてもだめだと知ると、今度は、まぶたをパチパチやるが、それはまるで青い蛾が目の中でバタバタしているように見える。更に、彼は足で地面をこするようにしながら、両手をしなやかに振って、トロット風に踊り始めるのであるが、冬の夕方の最後のかすかな光の中では、彼は、"the child of a swamphaunt" (p. 60) に似ていて、子供みたいである。とにかく、Lymon は Marvin を一目見た時から、まるで

"an unnatural spirit"(p. 63)にとりつかれたように、Marvinの後を追いかけ回すようになり、Marvinの気を引こうとするのである。それに対してAmeliaはどうしたかというと、まるで気が抜けたようになり、弱気で、決断力を失ったみたいになってしまう。仕事着を脱ぎ棄てて、それまでは日曜日か、葬式か、裁判の時しか着なかった赤いドレスを着ているようになり、Marvinを憎んでいるにもかかわらず、Lymonをお伴にしてMarvinが酒場にやって来ても追い出さず、ただで酒を出してやったり、苦笑いで迎えたりするが、Marvinが掛かるようにとわなを仕掛けたりもする。また一方では、Lymonを喜ばせようと、色々な見世物やパレードを見せに、車で遠くまでLymonを乗せて行くといった具合である。Lymonは毎朝早くから家を出てMarvinの家へ呼びに行き，１日中ついて回るが、AmeliaはLymonの方には好きなようにさせておく。そして、いつもLymonと一緒にAmeliaのテーブルで夕食を食べるMarvinを、彼女は毒殺しようとするのだが、間違って毒の入った皿を彼女自身が取り、一口食べかけてわかり、食べるのをやめるといったように、計画は失敗に終わるのである。

そのうちに、今度は、おそらくLymonが誘ったためであろうが、MarvinがAmeliaの家に入り込んで同じ屋根の下に暮らすことになって、LymonがMarvinに譲り、Ameliaが自分のベッドをLymonに譲り、彼女が居間のソファに寝ることになる。Marvinを憎んでいながら、AmeliaがMarvinを追い出さずに我慢するのは、もしMarvinを追い出せば、彼女が愛するLymonもMarvinについて出て行ってしまうことになり、彼女はまた一人ぼっちにならねばならないからである：

> She got caught in her own tricks, and found herself in many pitiful positions. But still she did not put Marvin Macy off the premises, as she was afraid that she would be left alone. Once you have lived with another it is a great torture to have to live alone. The silence of a firelit room when suddenly the clock stops ticking, the nervous shadows in an empty house—it is better to take in your mortal enemy than face the terror of living alone.(p. 72)

一人暮らしの恐怖におびえるよりは、たとえ敵でも一緒にいた方がいいというのは、孤独というものが、いかに人間にとって苦しいものかを表わしている。Ameliaは、孤独を恐れて、仕方なくMarvinを自分の家に置いているのである。LymonがAmeliaの一風変わった歩き方を真似したり、彼女の斜視の真似をしたりして、Marvinがそれを見て冷笑する時、彼女は二つの感情の板ばさみになる："Miss Amelia, when this happened, would be divided between two emotions. She would look at the hunchback with a lost, dismal reproach—then turn towards Marvin Macy with her teeth clamped. 'Bust a gut!' she would say bitterly."(pp. 73-74) Lymonの方は、Marvinがいくら相手にしてくれなくても、完全にMarvinの味方になってしまっている。Ameliaは拳闘の練習をやり始め、やがて、町の人々が見守る中で、いよいよAmeliaがMarvinと対決する日がやって来る。

二人の拳闘の対決は、最初はなぐり合いから始まり、30分ほどたったところで本当の格闘になったのだが、死に物狂いの段階になるとAmeliaの方が強く、彼女はMarvinを倒して馬乗りになり、たくましい大きな両手で、彼の喉元を締めつけたのである。ところが、Ameliaの勝ちとなった時に、誰にも信じられないことが起こる：

> And what took place has been a mystery ever since. The whole town was there to testify what happened, but there were those who doubted their own eyesight. For the counter on which Cousin Lymon stood was at least twelve feet from the fighters in the centre of the café. Yet at the instant Miss Amelia grasped the throat of Marvin Macy the hunchback

sprang forward and sailed through the air as though he had grown hawk wings. He landed on the broad back of Miss Amelia and clutched at her neck with his clawed little fingers. (p. 80)

こんなことがあったため、群衆がはっと気がついた時に、Amelia は打ちのめされてしまっていた。Lymon のおかげで、Marvin の勝ちとなり、最後には、Amelia は床の上に大の字に倒れ、両腕を投げ出したまま身動きもしなくなってしまう。Marvin にすっかり心を引かれてしまっていた Lymon は、Marvin が負けそうになった時に、Marvin の味方をしたわけで、そのためにAmelia は敗北したのである。この後 Marvin と Lymon の二人は酒場と沼地の蒸留酒製造所を完全に破壊して、それから一緒に仲良く姿を消し、Amelia はまた一人だけになってしまう。

一人取り残されて孤独になった Amelia は、以前はすぐれていた医者としての腕もすっかりだめになり、患者に対する賢明な治療がすっかり影をひそめてしまう。一人取り残された孤独な Amelia の姿は、物語の冒頭で描かれた Amelia の姿とほぼ同じであり、結末の部分では次のように描かれている：

Miss Amelia let her hair grow ragged, and it was turning grey. Her face lengthened, and the great muscles of her body shrank until she was thin as old maids are thin when they go crazy. And those grey eyes—slowly day by day they were more crossed, and it was as though they sought each other out to exchange a little glance of grief and lonely recognition. She was not pleasant to listen to; her tongue had sharpened terribly. (pp. 82-83)

これは、言い様のない孤独に苦悩する Amelia を極めて巧みに表わしていて、Amelia の孤独が読む者の心にひしひしと伝わってくるような描写であると言える。Amelia の声も昔の活気を失ってしまい、Lymon の話が出た時、"Ho! If I could lay hand to him I would rip out his gizzard and throw it to the cat!" (p. 83) と言う彼女の声にも復讐の響きはなく、つぶれたような弱々しい声になり、教会のパイプオルガンの泣くような哀れな声になっている。Amelia は 3 年間 Lymon を待つが、Lymon は帰って来ることはなく、どうなったのかわからない。4 年目に、彼女は大工に頼んで、家の窓や戸口に板囲いをして、以来ずっと閉ざされた家の中にこもったままでいる。

このような Amelia の描写の後は、冒頭部分のわびしい田舎町の描写を再び繰り返すように、"Yes, the town is dreary." (p. 83) で始まって、わびしく、退屈な町の様子を描いた後、冒頭部分と同じように、"You might as well go down to the Forks Falls highway and listen to the chain-gang." (p. 84) で終わっている。そして最後に、"The Twelve Mortal Men" という題名のついた、約 1 頁ほどの"chain-gang" についての描写があり、彼らが労作業をしながら歌う歌声について、次のように描かれている：

And everyday there is music. One dark voice will start a phrase, half-sung, and like a question. And after a moment another voice will join in, soon the whole gang will be singing. The voices are dark in the golden glare, the music intricately blended, both sombre and joyful. The music will swell until at last it seems that the sound does not come from the twelve men on the gang, but from the earth itself, or the wide sky. It is music that causes the heart to broaden and the listener to grow cold with ecstacy and fright. Then slowly the music will sink down until at last there remains one lonely voice, then a great hoarse breath, the sun, the sound of the picks in the silence. (pp. 84-85)

この物語が、現在を描いてから、過去にさかのぼり、再び現在に戻るという形式であるからに

しても、冒頭のわびしい田舎町の様子と、言い様のない孤独に苦悩するAmeliaの姿を、結末においても同じような言葉を用いて繰り返し描くことは、物語全体の孤独な感じを一層強めているように思われる。そして、鎖につながれたまま、労作業を続ける"chain-gang"を最後に描くことにより、作者は、人間は所詮は誰でも孤独な存在であり、孤独という鎖からのがれられないのだということを、示しているのではないかと考えられる。そんな風にこの作品を読む時には、"chain-gang"の歌声もわびしい歌声であり、物語そのものの孤独な感じを強める、効果的な役割を果たしていると思われてならないのである。

Ⅲ

これまで見てきたように、McCullersは、冒頭のわびしい町の描写によって、登場人物たちの孤独を暗示するという方法をとっているが、その描き方は極めて巧みである。また、それと同様の描写を結末で繰り返すことによって、作品の孤独な雰囲気を強めたことも、技巧的にすぐれていると言えるであろう。登場人物について言えば、MarvinがAmeliaに、AmeliaがLymonに対して愛情を抱き、LymonはMarvinに心を引かれるといった、完全な一方通行の愛を描いているのだが、報われない愛ほど、愛する者を孤独に追いやるものはなく、このような愛は、孤独を描く上で、最も適した題材であったのである。MarvinやAmeliaの性格が、愛によって変わる様子の描写も巧みであり、作者のすぐれた技巧の表われと言える。愛の理論によれば、愛する者や、愛される者には、誰でもなれるのであるから、愛が報われないことから生まれる孤独は、人間なら誰もが直面する状況であり、愛と孤独は、普遍的な主題であると言うことができる。Ameliaは、育った環境が原因であると考えられる、女性としての未熟さから、Marvinを愛すことができず、自分が愛したLymonはMarvinに心引かれるといった具合に、自分では孤独からのがれることができず、悲劇的である。MarvinもLymonも、相手から見向きもされないという点で、孤独な人物たちである。結末部分の"chain-gang"は、人間が孤独からのがれられないことを表わすのに、象徴的に使われている。全体として見るならば、やはり、McCullersが孤独を描く技巧は、極めてすぐれていると言わざるを得ない。

註

1 Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton: Princeton University Press, 1961), p. 209.
2 Albert J. Griffith, "Carson McCullers' Myth of the Sad Café," *Georgia Review,* 21 (1967), 54.
3 Joseph R. Millichap, "Carson McCullers' Literary Ballad," *Georgia Review,* 27 (1973), 329.
4 Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café* (London: Penguin Books, 1987), p. 7. 以後、この作品からの引用はこの版によるものとし、引用箇所の後の括弧内に、その頁を記す。
5 Lawrence Graver, *Carson McCullers* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), p. 25.
6 John B. Vickery, "Carson McCullers: A Map of Love," *Wisconsin Studies in Contemporary Literature,* 1 (1960), 15.
7 Louise Westling, "Carson McCullers' Amazon Nightmare," *Modern Fiction Studies,* 28, 3 (1982), 470.
8 Richard M. Cook, *Carson McCullers* (New York: Frederick Ungar, 1975), p. 88.
9 Millichap, 335.
10 Westling, 470.